

琉球大学学術リポジトリ

戦後琉球における甘蔗栽培の推移 (完)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池原, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19849

戦後琉球における

甘蔗栽培の推移

(完)

第六表 地区別甘蔗生産高

年次	1952年の生産高を100とし		年次	1952年の生産高を100とし		
	生産高千斤	高を100とした指数		生産高千斤	高を100とした指数	
一九五二年	北部	17.596	100	北部	22.384	127
	中部	10.260	100	中部	9.456	92
	南部	147.255	100	南部	164.741	112
	宮古	94.194	100	宮古	174.546	185
	八重山	14.975	100	八重山	17.370	116
一九五三年	北部	29.699	167	北部	33.259	189
	中部	16.075	157	中部	36.912	360
	南部	282.345	192	南部	269.570	183
	宮古	245.960	282	宮古	201.551	214
	八重山	43.623	225	八重山	77.975	521
一九五四年	北部	46.912	267	備考(1)1950年 1951年は資料不備のため省略した。 (2)糖業課資料より作成		
	中部	36.171	353			
	南部	395.037	268			
	宮古	225.540	239			
	八重山	72.763	486			
一九五五年	北部	46.912	267	備考(1)1950年 1951年は資料不備のため省略した。 (2)糖業課資料より作成		
	中部	36.171	353			
	南部	395.037	268			
	宮古	225.540	239			
	八重山	72.763	486			

年期一九五五年期の地区別復旧率は三カ年平均

戦前昭和九年一昭和十一年の三カ年平均の地区別生産高は北部一億一千四百七十八万九千九百九十九斤、中部一億一千八百七十七万六千九百九十九斤、南部一億一千四百五十八万五千斤、宮古一億七千二百六十六万九千九百九十九斤、八重山八百五十四万三千斤である。戦後生産高の最高

十分な生産を期待することは出来ない。作物の持つ先天的能力(遺伝的特性)がよく、しかも環境条件が良好で且つ栽培技術が合理化されて始めて最大の生産を期待する事が出来る。品種改良が反当収量に及ぼした影響について日本

に対して夫々北部四一%、中部七%、南部六一%、宮古一三%、八重山八五二%で、特に八重山地区の生産高の伸び方は著しい。戦前の生産高は南部地区が首位で、次いで中部、宮古、北部、八重山の順で戦後は、一九五三年期までは南部、宮古、北部、八重山、中部の順であるが一九五四年期以降八重山地区の進出は目覚しく北部地区を凌駕し、南部、宮古、八重山、北部、中部の順位となっている。一九五五年五六年期における中部地区の増産も目立ってきた。

では過去十カ年間に水稻の反当収量が約二割程度増収を来したと言われている。琉球の甘蔗にいてもかかる傾向は見られる即ち琉球における甘蔗の品種は明治の初期から大正の末期に至るまでほとんど説谷山種と島蔗であったが大正十二年台湾から大茎種「P.O.J」が始めて導入されて以来次々と優良品種が導入された。試験の結果二、三の品種が琉球の気候土質に適するものとして奨励品種に指定され、之が一般蔗作農家に普及されるや年々生産量の増加を来した事は事実である之について戦前説谷山種の全盛時代でしかも自然的条件も良好な年で且つ前後二一三カ年において反当収量の多い大正十二年とP.O.J系の大茎種が蔗作農家に普く栽培され説谷山種が後を絶つたと思はれる昭和十五年(僅かに説谷山種が残つてゐる)とを比較してみるに大正十二年期の作付面積一七、三六〇、三町、反当収量六、三八六斤、蔗茎収量十一億八千六百六十一万斤に対し昭和十五年期のそれは夫々一四、九〇四町、一〇、〇九六斤、十五億四百六十一万斤で、作付面積においては二、四五六町の減反に対し逆に蔗茎収量は三億零斤反当収量三、七一〇斤(五八%)の増加を見せている。大正十二年から昭和十五年に至る十七カ年間に於ける生産量の増加を齎した要因は新品種の導入、栽培技術の向上(耕種標準の励行新肥料の導入と合理的施用)其の他自然的条件のよき等考えられるがわけても新品種の普及が増産を招来した大きな要因であると思う。

戦後一九五七年十一月初めて奨励品種として「C.O.310」と「E-41-300」の両品種が指定され全琉蔗作農家に普及されつつある。この両品種は反当

収量も多く且つ暴風に対する抵抗も強いので琉球の気候風土に適したよい品種だと言われている。この両品種について中央農業研究指導所における過去三カ年間の試験結果によれば、従来広く栽培されたマウンスンに比し夏植の反当収量NCO310H-44-3008は夫々一、一四三斤、四、八七七斤春植において夫々七三九斤、二、七九二斤、株出において夫々八、六二斤、三、一六三斤の増収を示している。

この二品種が全琉蔗作農家に普及されその成果(反収)が中央農業研究指導所の成績の五割の増収があつたと仮定し、之を一九五五年度の作付面積から計算して見れば次の如き結果が生ずる。

1955年期の作付面積についての増収量

NCO 310	夏 植		春 植		株 出	計	備 考
	斤	144	斤	250			
	213,140	144	8,297	250	87,340,860	156,653,248	1955年期待付面積 夏植=38,252反 春植=22,425反 株出=20,263
H.44 3908	93,296	628	31,305	300	32,051,320	308,778,254	

即ちNCO310の普及によつて一億五千六百余万斤、H-11-3908の普及によつて三億八千余万斤の増収を齎らすことになる。又作付面積について計算して見れば、一九五五年度の面積よりNCO310の場合一、六四一、五町エー1-3908の場合一、二二五、五町の増反をしたのと同じ結果となる。反当収量の増加と共に考えられるのは作付面積の増加であるが之は前述の如く各地区共相当の隘路がある様に思う。作付面積の増加は開墾、干拓、埋立あるいは荒蕪地の耕地化等による耕地の拡張と、他の食糧作物を排除して増

反する場合が考えられる。北部地区や八重山地区は開墾により、その他の地区は荒蕪地の蔗作地化か他作物の排除によつて伸びるのである。しかし他作物の排除により面積を増加するという事については相当の難点がある様に思う。八重山、北部地区においては甘蔗の競争作物たるパインの出現により作付面積が蚕食されつゝあり、品種改良による増収の外、土地改良により低位生産地の生産力を引上げる事による増収や栽培技術の合理化(適期作業、施肥の合理化)によつても増収が期待される。特に低位生産地の問題は甘蔗だけでなく他の作物についても言ひ得る事で将来琉球農業の問題として考慮さるべき点ではなからうか。要するに生産量の増加は作付面積の増加と反当収量の増加にまたねばならないが作付面積の増加は戦前の蔗作率から考え合わせた場合今伸びる余地が少い様に思はれる。従つて期待さるべきは近代科学の発達により現在以上の優良品種を作出し、栽培の合理化と相俟つて以つて反当収量の増加を図る事にある様に思う。(おわり) (池原眞一)

参考文献、1、藤田親義 琉球と鹿児島

- 2、琉球政府資源局 南西諸島の糖業
- 3、沖縄県農会編 糖業年報
- 4、琉球政府糖業課資料
- 5、野口弥吉 農学概論

土と植物と動物

一 植物と動物の必須元素のはなし

(一) 亜鉛

動物植物共に必須元素の一つである。

植物では葉緑素の生成に関係があり、ある植物では黄化(又は白化)現象を防止する事が出来る。又ある植物ではその生長を刺激(しげき)し又他の植物では生理作用の混乱を防ぐ。例えば柑橘(かんき

つ)類の斑葉病、とうもろこしの白芽が出来るのを防ぐ事が出来る。

動物では亜鉛はインシュリンやその他酵素の成分であり、恐らく生長や毛髮生成に必要なものであると云われている。インシュリンは周知の如く砂糖類の体内燃焼にはなくてはならないホルモンである。

(二) アルミニウム

動物植物共に必須元素とは考えられていないが、植物においてはある種の解毒作用を持つものと考えられている。例えば加里の過剰濃度の有害作用を除くものと考えられている。また原形質の透過性光合成チアスターゼの作用等に影響すると云われている。

(三) 硫黄

動物植物共に必須元素である。

植物においては蛋白質その他の化合物の組成成分の一つであり、蛋白質及葉緑素生成に影響し、根の生長を盛ならしめ、まめ科植物のバクテリアの生長を刺激するものと考えられている。

動物においては硫黄は栄養分の酸化に必要であり又蛋白質やインシュリンの成分である。

ついで (鎮西 忠茂)

発行所 琉球大学農家政学部

発行人 島袋 俊一

印刷 沖縄タイムス社